

## VI 結 語

### 入間・武蔵野台地における砂川期の様相

#### はじめに

屋瀨遺跡は、北緯35°51'32"、東経139°20'22"、武蔵野台地と入間台地を画する、入間川の北約2.8kmに位置する。本遺跡の東側を、圏央道の建設に伴い、台地を南北に縦断するように発掘調査が実施され、先土器時代の遺跡を多数調査してきた。圏央道関連遺跡の整理・報告書の作業が進む中、本遺跡の整理も相前後して実施することとなった。その結果、近接する砂川遺跡を示準とする、砂川期の良好な資料の蓄積を見ることができた。

現在、本遺跡と同時進行で整理をしている、坂東山遺跡の成果も合わせ、これら資料に対し、今度どの様に対峙して行くかを、筆者なりに検討することを本結語の目的とする。

#### 1. 遺跡

入間川の兩岸、入間台地と武蔵野台地に分布する該期の遺跡は、北から鶴ヶ丘遺跡、西久保遺跡、屋瀨遺跡、坂東山遺跡、城の腰遺跡、砂川遺跡、宮林遺跡、お伊勢山遺跡、中砂遺跡等が分布し、武蔵野台地東部に葛原遺跡B地点、天祖神社東遺跡、城山遺跡、丸山東遺跡、愛宕下遺跡、宮ヶ谷戸遺跡等が見られる。ここでは前者のみを対象とし、後者については今後の課題としたい。

#### 屋瀨遺跡

石器集中1箇所が検出された。調査区の東側限界まで遺物の分布が広がっており、調査区外に延びる可能性が高い。県道建設に伴う発掘調査のため、調査範囲が带状で、遺跡の全体は捉えづらい。また台地に直交する調査区であるため、他に石器集中が分布する可能性は高いが、ここでは、石器集中1箇所の単独遺跡として検討しておく。

石器組成は、狭義の Tool がナイフ形石器のみと単純であるが、一つの集中で12点は多い。石器石材はチャート

を主体に頁岩等を含むなど、該地域・該期の一般的在り方を示している（柴田徹氏の御教示による）。各母岩の数量と、製品・整った縦長剥片の在り方は、必ずしも比例しておらず、反って単独・小数母岩にナイフ形石器・縦長剥片が見られる。一方、石核は数量の多い母岩から、それぞれ1点検出されている。

谷を隔てて近接する中台遺跡は、剥片類のみの出土で、時期を決める要素に欠ける。最近同遺跡の調査を当事業団が実施し、ナイフ形石器等が検出されている。詳しくは、今後明かになると思う。

#### 坂東山遺跡

西久保遺跡と同じ圏央道に伴う発掘調査である。石器集中1箇所が調査区の東側の限界近くで見つかっており、遺物は調査区外に延びる可能性が高い。また、他に石器集中が有るかは、現時点では不明である。

器種組成はナイフ形石器が主体で、ブランディングチップが多いのが目につく。また、礫器・磨石等が伴っているのは注目される。砂川期の礫器は在家遺跡・丸山東遺跡で報告されており、今後注意していく必要があるかもしれない。

石器石材はチャートを主体に、珪質頁岩等が少量含まれる。チャートは良質なものと、節理の発達した粗悪なものがみられる。

#### 西久保遺跡

砂川期の石器集中と、岩宿II期の石器集中が埋没谷北側の緩い斜面に、さも対面し整列しているかの様に、等高線に直交して並んでいる。

報告書では、石器集中7箇所としているが、石器集中5は問題があるため、今回の検討から除外する。6箇所の石器集中から総数2266点、ナイフ形石器33点が出土している。遺跡の規模等、入間台地の該期の中心的存在である。

各石器集中を概観すると、標高76m付近に纏まる石

器集中1a～1cと、標高77m付近に纏まる石器集中2～5の2つのグループに分けることができ、それぞれ3つの石器集中によって、構成されている。近接する石器集中間での母岩の共有は多く、接合は集中内のものが主体を占めている。しかし、石器集中・グループは独立した関係ではなく、石器集中間、グループ間での接合(石器集中1bと石器集中4)、母岩の共有を見ることができる。

石器集中3は、該期資料の50%以上を有する石器集中で、径2.4mの範囲に非常に密集している。接合例も多く、集中内に限定されていることから、剥片剥離の作業空間とも考えられるが、ナイフ形石器15点など狭義の Tool も多く、一概に石器集中の性格を云々するのは難しそうである。

器種組成は、石器点数の多さに伴ってか、ナイフ形石器、彫器、搔・削器等充実している。しかし、相模野台地方面で共伴すると報告されている、尖頭器の存在は確認できない。

石器石材の認定に関して、報告書の時点で一部のチャートと粘板岩に分類したものが、本書、柴田氏の種類による屋洲遺跡の報告では頁岩・珪質頁岩としている。筆者が関わった報告書で短期間のうちに、石材名の変更は混乱を生じる原因になり、反省すべきであるが、ここでは、緩やかな捉え方(数値等は、今後の課題として)で石器石材に触れておく。

石器に用いられている石材の主体が、チャートである点は変わらないが、約1割近い量で、安定して良質な頁岩(風化によって表面は白色・灰白色に近いが、新鮮な面を観察すると、色調のベースは黒色で細い白色の縞が入る)が含まれている。

チャートは良質なものが多く、原石面の形状から、亜角礫か円礫が用いられていたようである。赤玉石と愛称されている石材も、量的には少ないが、ナイフ形石器等の素材として使われている。

#### 砂川遺跡

学史的に著名な遺跡で、該期の示準遺跡である。石器集中はA区とF区からそれぞれ3箇所、計6箇所見

つかっている。石器はナイフ形石器48点を中心に、彫器等が検出され、良好な接合資料から「砂川型刃器技法」が提唱されている。

石器石材は、報告書によると珪岩を主体に頁岩・黒耀石とされているが、珪岩の中に本報告でチャートとしたものが含まれていると思われる。

#### 鶴ヶ丘遺跡

遺物は石器集中1箇所と、住居跡等の覆土から出土している。製品は原位置を離れた状態のものが多く。

ナイフ形石器と共に尖頭器が報告されているが、やや地点が離れるようである。石器石材の主体は、報告書に詳しくないが、掲載されている写真を見る限り、チャートと頁岩が多く使われているようである。また、尖頭器の1点は黒耀石製である。

#### 宮林遺跡

道路拡幅に伴う発掘調査であるため、調査範囲は狭いが、石器集中5箇所と礫群が検出された。近接するお伊勢山遺跡でも該期の石器が出ているが、ナイフ形石器の量等から本遺跡を対象とした。

石器点数は446点と多い方ではないが、ナイフ形石器、彫器、搔・削器等器種は充実しており、石核に剥片類が接合する資料が多く、該期の剥片剥離の状況を知る良好な資料である。また、ナイフ形石器の破損品(ブランディングチップ)等が多数見つまっている点も注意される。

石器石材は、頁岩とチャートが主体で流紋岩・黒耀石等が含まれる。石材による剥片剥離の違いは少なく、打面再生を繰り返しながら、単設または両設打面から縦長剥片を連続して剥がしており、いわゆる砂川型刃器技法の範疇に含まれる。

#### 中砂遺跡

複数期の重複遺跡である。該期の石器集中は5箇所あるが、遺物は土層堆積の薄いところに多く、他時期の石器集中と重複し、良好な状態とは言えない。そのため、石器の帰属時期が不明確なものが多く、特徴的な石器のみを取り上げた。

器種組成はナイフ形石器、彫器等があり、石核と剥

第39図 砂川期の遺跡



片の接合が見られた。石器に用いられている石材は、チャートと粘板岩であるが、粘板岩の多くは本報告で頁岩とした石材と近い。

## 城の腰遺跡

石器集中は4箇所確認されている。市道建設に伴う発掘調査のため、調査範囲は幅4.6m、長さ320mと制約が大きく、遺跡規模・石器集中の全貌は明らかでないが、石器集中の分布を見る限り、大規模遺跡になる可能性が高い。

石器集中は、ナイフ形石器を持たない2箇所も含め、全て該期に属すると思われる、2箇所で礫群が伴っている。器種組成は、ナイフ形石器が主体で、彫器1点を含む。表土・包含層資料の中に、尖頭器が見られるが、共伴に関しては不明である。

石器石材は、報告書にチャートを主体に酸性凝灰岩、黒耀石と記載されているが、掲載写真を見ると、酸性凝灰岩は本報告書で頁岩を分類した石材に似た印象を受ける。チャートは縞が入るもので、該地域で多く用いられている石材かもしれない。

## 2. 遺跡間の距離

各遺跡の直線距離を地図上で計測したものを表にした。遺跡は入間川兩岸の屋淵・西久保・坂東山・城の腰遺跡、小畦川流域の鶴ヶ丘遺跡、狭山丘陵から砂川堀流域の砂川・宮林・中砂遺跡の3つに分けて、便宜的に前者からグループa・b・cと呼ぶことにする。

遺 跡	→遺 跡	距 離
屋淵遺跡	→西久保遺跡	3.7km
	→坂東山遺跡	5.0km
	→城の腰遺跡	6.1km
	→鶴ヶ丘遺跡	9.9km
西久保遺跡	→坂東山遺跡	4.0km
	→鶴ヶ丘遺跡	7.4km
	→中砂遺跡	8.2km
	→砂川遺跡	8.4km
坂東山遺跡	→宮林遺跡	4.8km
	→砂川遺跡	5.0km
	→中砂遺跡	5.5km
	→城の腰遺跡	6.0km

城の腰遺跡	→宮林遺跡	8.0km
	→砂川遺跡	8.7km
砂川遺跡	→宮林遺跡	1.0km
	→中砂遺跡	2.0km
	→鶴ヶ丘遺跡	14.5km
中砂遺跡	→鶴ヶ丘遺跡	13.5km

遺跡間の距離を見ると、1kmから6kmの範囲（鶴ヶ丘遺跡が若干離れており、最も近い西久保遺跡で8.4kmある）に同じ時期の他遺跡が位置していることになる。同時期の遺跡が密集する地域として、一つの遺跡群として捉えることができるかもしれない。

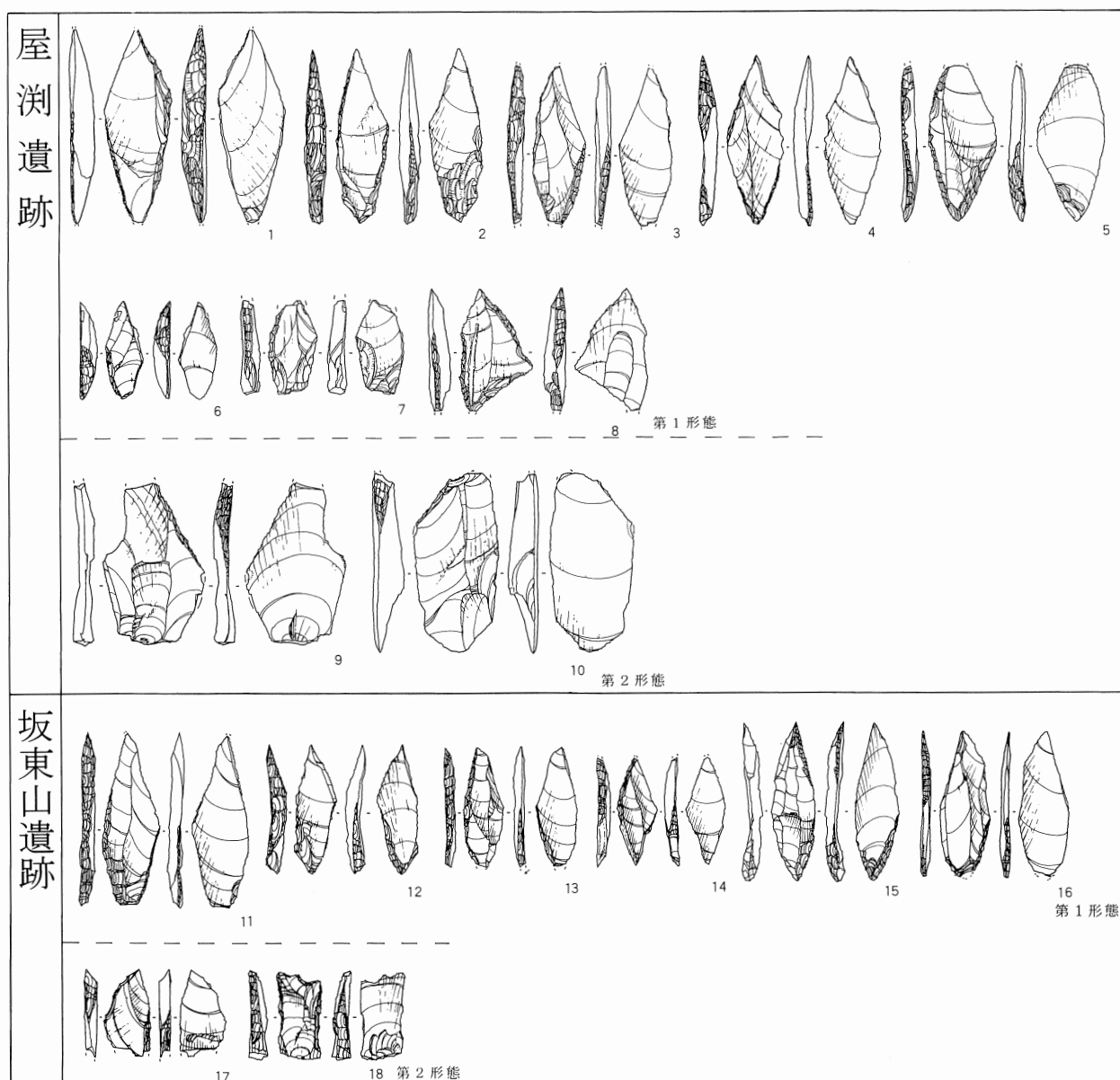
次に、各遺跡の規模を見ると、全貌が明らかでない遺跡が多いため論究するのは危険であるが、現時点では、グループaは西久保遺跡、グループbは砂川遺跡が中心的遺跡として挙げられる。両遺跡は、複数の石器集中（ともに3箇所であった）が近接して、一つのグループを作り、そのグループが幾つか（ともに2つ）集まって遺跡を構成している。グループ内での接合・母岩の共有は盛んであり、グループ間においても一定の接合・母岩の共有が見られる点で共通している。また、各石器集中によって、ナイフ形石器の在り方に差がみられる。砂川遺跡はA区とF区で点数的には拮抗しているが、F区は欠損品が多くA区との間に明かな差がある。石器集中単位で見ると、A区が平均して保有しているのに対し、F区はF2ブロックに点数が片寄り、F3ブロックからは出土していない。一方、西久保遺跡はグループ間での差は少ないが、集中単位で見ると、石器集中3に全石器の半数以上が片寄って出土している。

他の遺跡は、屋淵・坂東山遺跡は石器集中1箇所だが、ナイフ形石器を10点以上保有している。宮林・城の腰遺跡はナイフ形石器を保有する石器集中と、保有しない石器集中があり、石器集中の数に対しナイフ形石器の数点は少ない。

以上、該地域の遺跡間の距離と内容を雑駁に概観したが、砂川遺跡に近接して、該期の遺跡がさも遺跡群を形成しているかのように見える。

## 3. ナイフ形石器

第40図 屋洩遺跡・坂東山東遺跡



該期のナイフ形石器に関して、砂川遺跡の報告書と、田中氏の形態分類がある。1次調査の報告書では、ナイフ形石器を第Ⅰ～Ⅲ形態の3つに分けている。2次調査では、再検討しA類～E類の5細分し、問題のあるE類を除き、それぞれ独立した形態として捉えている。

一方、田中氏は個々の差異を超えた共通性があるものを第1形態とし、第2形態と区分し整理している。ここでは、基本的に田中分類と各部位の名称に準拠するが、一部異なる部分があるかもしれない。

屋洩遺跡 (第40図)

各形態の説明は、事実記載を参照。

第1形態の大きさは、長さが6 cmに近いもの、5 cm前後、3～4 cm程度のものの3つに分けられる。幅は1～2 cmに纏まり、長さとの関係は顕著でない。厚さは1 cm以内に納まる。

第2形態は、先端を欠損するが、長さが5 cm前後で幅が3 cm近い大形品である。

坂東山東遺跡 (第40図)

第1形態は、外形が三角形になるものが多い、左右対称の柳葉形になるものがある。刃部は右刃が多い。

第41図 西武蔵野遺跡



背縁の調整加工は、基端から先端まで Blunting が施される11～14、先端と基端周辺に Blunting が施される15・16がある。側刃縁の調整加工は14・16が Blunting、11が微細な剥離、12・13・15が裏面加工と多様である。

大きさは、長さ4～5 cmと3 cm大の2つに分けられ、幅はほぼ1～2 cm大に納まる。厚さは1 cm以下で屋淵遺跡より薄手である。

第2形態は、17は先端を斜めに切るような調整加工、18は先端が“コ字状”となり両側縁に調整加工を施している。大きさは、資料的に少ないが、長さ2 cm大、幅1 cm大、厚さ1 cm以下に纏まっている。

#### 西久保遺跡（第41図）

第1形態の外形は、三角形・左右対称の柳葉形・幅広く刃部が狭いものと多様で、刃部は右刃と左刃の割合が2対1である。

背縁の調整加工は、基端から先端まで施されるものは4・5・8・9・11～13・15・16・18・19・29で、5・18が粗い剥離、19は先端上半部が Blunting で下半部が微細な剥離、それ以外のものは Blunting、15は微細な剥離のみである。先端上半部のみに加工を施しているものは、1・10・14・17・20・21で先端に近い部分が Blunting、下半部に向かって微細な剥離に変わってゆく。

側刃縁の調整加工は、4・5・9・10～13・15・16・18～21・29が Blunting、8・14が微細な剥離、17は部分的に微細な剥離が施されており、明確な裏面加工は見られない。

大きさは、長さが5 cm以上のもの、4～5 cm、2～4 cmの3つに分かれる。幅は1～2 cmに納まり、長くなるとやや幅広になるが、それほど顕著ではない。厚さは1 cm以下が主体である。

第2形態の外形は、先端を上にした三角形になるもの、先端を斜め・直角に切るように加工を施したもの、不整形の剥片の一側縁に、調整加工を施すものなど多様である。

大きさは、長さが2 cm大のものと、3 cm以上のものに分かれる。幅・厚さに関しては差は見られない。

#### 砂川遺跡（第42図）

第1形態の外形は、平行四辺形・三角形、また左右対称で柳葉形になるなど多様であるが、形状は流麗で整ったものが多い。

背縁の調整加工は、1～4・6・13・14・17～19は基端から先端まで Blunting が施され、3・14・16は基端付近は裏面加工になっている。5・11・12は上半部のみに加工が見られ、7は先端と基端に分かれて加工が施されている。12は8・15に似ており、第1形態の範疇に納まるか疑問もあるが、一応本形態に留めておく。

側刃縁の加工は、1～3・7・17・19が通常の Blunting 加工が施されているようで、17は裏面加工を伴うようである。6・13・14・18は裏面加工が施され、21・25は基端付近は裏面加工のみによって整形されている。また、13の刃縁部調整加工は特徴的である。

大きさは、長さは6 cm以上のもの、4～6 cmのもの、4 cm以下の3つに分かれる。幅は大きくなると広がるが、それほど顕著な違いはない。厚さは長さ6 cm以上のものが2 cm大になる以外は、大凡1 cm以内である。

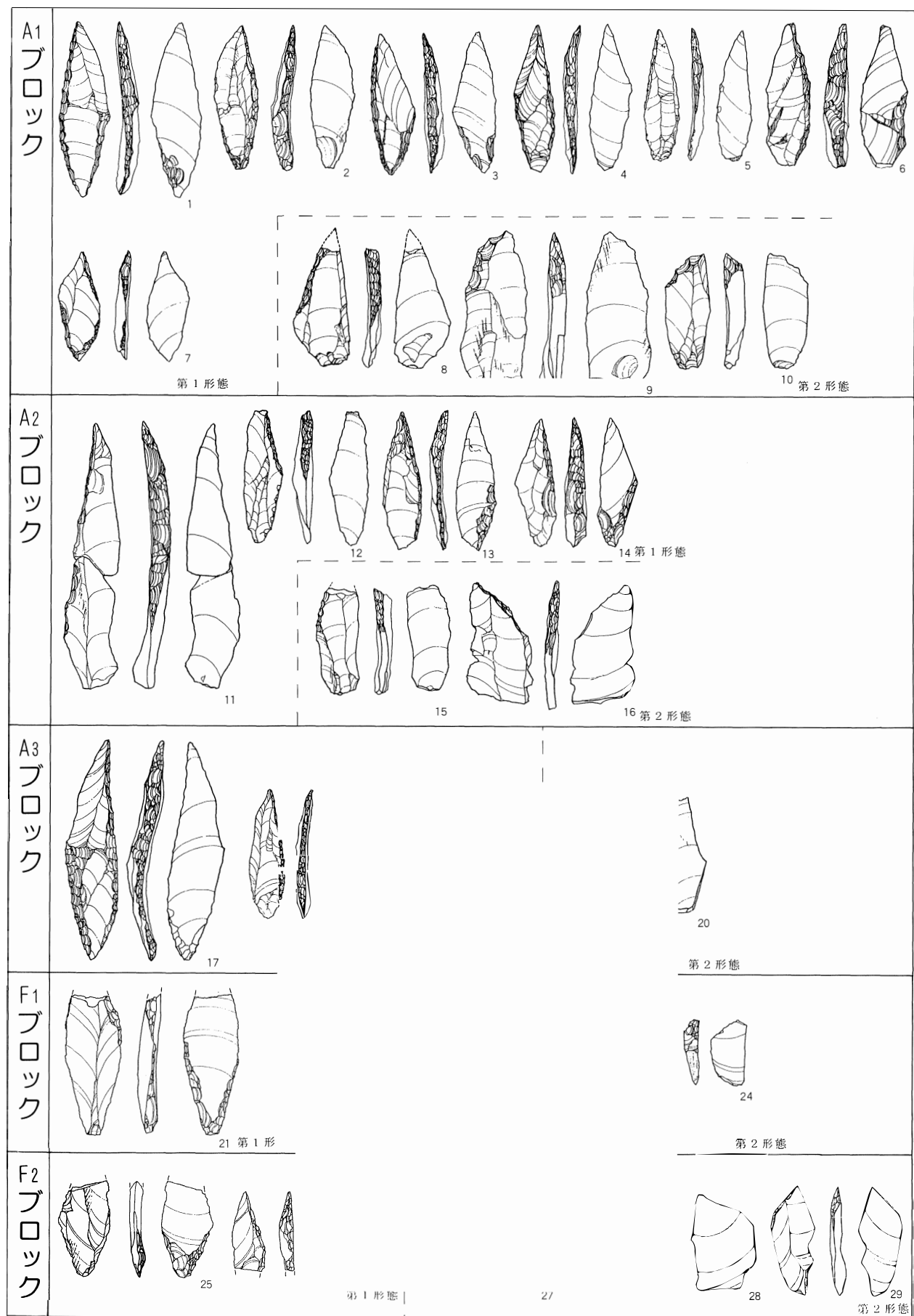
第2形態の外形は、三角形または方形に近いもの、剥片の一端を斜めに切るように調整加工が施されるものなど多様である。大きさは、第1形態同様、長さ5 cm以上、3～4 cm、3 cm以下の3つに分かれる。幅は長さによる違いは見られない。厚さは1 cm未満に大凡納まっている。

#### 鶴ヶ丘遺跡（第43図）

第1形態は、全て欠損品であるため、詳しくは不明であるが、大凡の外形は三角形になると思われる。調整加工は、背縁は基端から先端まで Blunting が施され、側刃縁は1・2が微細な剥離、3は裏面加工が施されている。大きさは、欠損を考慮し、長さは大凡4 cm大に纏まり、幅・厚さも一定している。

第2形態は、剥片の一端を斜めに切るように調整加工を施しているものが多く、4は背縁のみに加工を施したもので、第1形態の範疇に含むべきかもしれない。大きさは、長さが2 cm大、4 cm前後の2つに分かれ、幅は1～2 cm近くまでばらける。厚さは1 cm以内に納まっている。

第42図 砂川遺跡



第43図 鶴ヶ丘遺跡・宮林遺跡・中砂遺跡



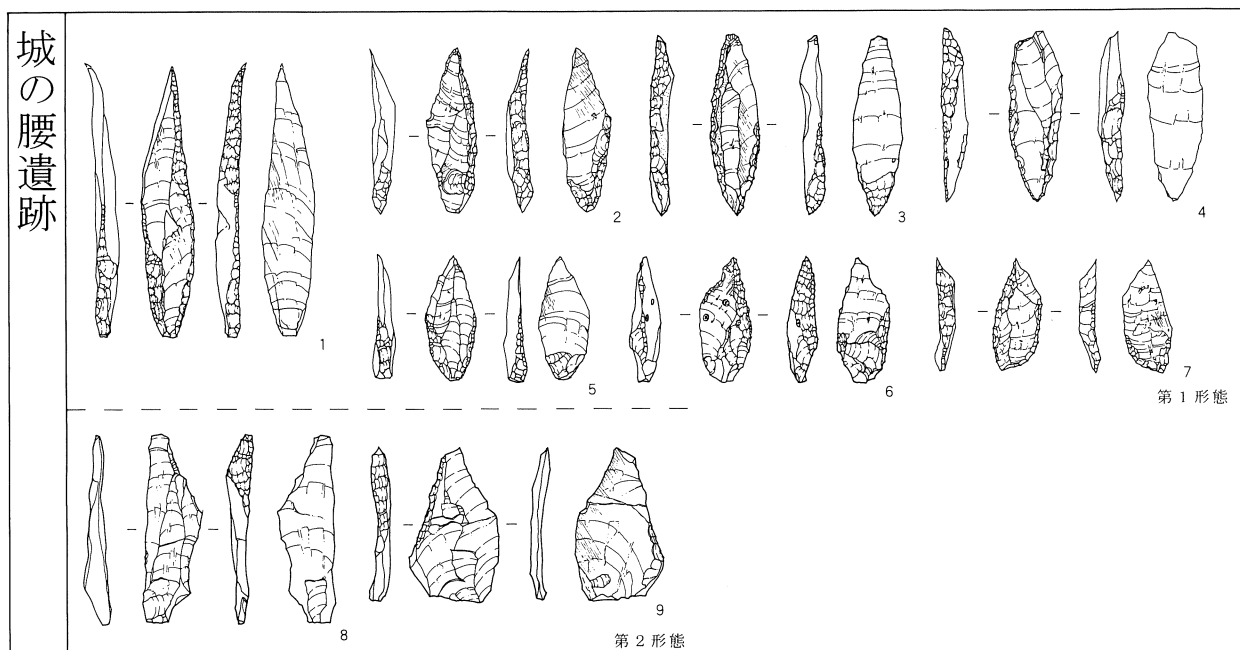
#### 宮林遺跡 (第43図)

第1形態は、報告書でも指摘されているが、ここで取り上げている他石器群と若干様相が異なっている。外形は三角形のもの11、左右対称で柳葉形になる10、不整形に近い平行四辺形の12である。調整加工は、背縁は基端から先端まで施される10・11と、先端のみに施す12が見られ、側刃縁には Blunting が施されている。

る。大きさは、長さ3cm前後の小形で、幅・厚さは一定している。

第2形態は、外形が三角形を呈するもの、背縁のみに調整加工が施されるもの、剥片の一端を斜めに切るように調整加工が施されるものが見られる。なお、14は13が欠損した後、再度ナイフ形石器に加工しなおしたものである。

第44図 城の腰遺跡



大きさは、長さ4 cm以上のものが欠損品で、完形のものは3 cm前後に纏まる。幅は2 cm前後でばらつく。厚さは1 cm以内に納まる。

#### 中砂遺跡（第43図）

該期の最も特徴的な、第1形態のナイフ形石器2点を取り上げた。外形は平行四辺形になる、20は背縁の調整加工が基端から先端まで Blunting、側刃縁に微細な剥離が施される。21は背縁上半部と側刃縁に Blunting が施されている。大きさは、欠損を考慮すると、長さは5 cm大となり、幅・厚さは一定である。

#### 城の腰遺跡（第44図）

第1形態の外形は、三角形・平行四辺形を呈する、形状の整った1~4と、左右対称で尖頭状をしている5と不整形に近い柳葉形の6・7がある。調整加工は、背縁の基端から先端までが1~4・7、下半部のみの5、上半部のみの6である。また、1・4は上半部が Blunting で下半部が微細な剥離が施されている。側刃縁の加工は1・3・4・7は Blunting、2・6は裏面加工が施されている。

大きさは、長さ7 cm以上のもの、4~5 cm、3 cm前後の3つに分かれる。幅・厚さは一定している。

第2形態は剥片の一端を斜めに切るように調整加工を施したもので、長さ4~5 cm、幅1~3 cmのばらつ

きがあり、厚さは1 cm以内に納まっている。

以上、各遺跡出土のナイフ形石器を概観したが、次に若干整理をしておく。

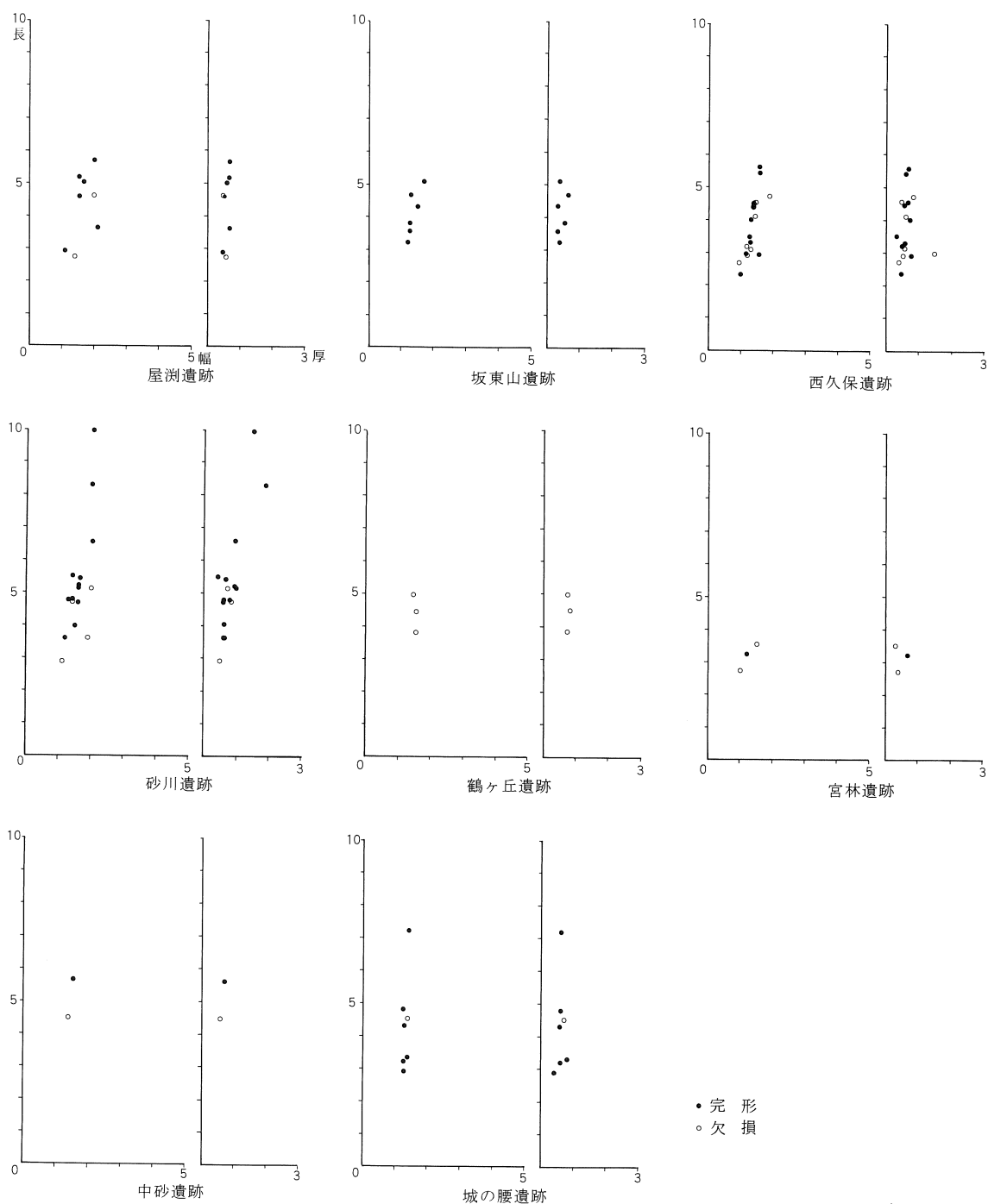
第1形態の外形は、三角形・平行四辺形が多く、柳葉形が含まれる。基端の形状は、尖るものが多いが錐状や側刃縁を挟むようなものではなく、丸・コ字状になるものがある。背縁の調整加工は基端から先端まで Blunting 調整が施されるものも多く、形状が流麗であるが、調整加工は力強い感じを受けるものもある。また、外形が平行四辺形のものの一部に、下半部が微細な剥離になるものがある。裏面加工は遺跡によって片寄りが見られる。刃縁調整加工はいまのところ砂川遺跡のみである。

大きさは、砂川遺跡で指摘された大中小の区分で大凡捉えられるが、大形のものは少なく、多くの遺跡では中小の区分が妥当である。

石器石材とナイフ形石器との関係は、チャート・頁岩のものが多く、若干黒曜石・ガラス質黒色安山岩が用いられているが、形状を苦勞して似せているように感じられる。

第2形態の外形は多様で、第1形態に比べ規範が緩く、異なる原則が働いていたように感じられる。

第45図 ナイフ形石器（第Ⅰ形態）



## おわりに

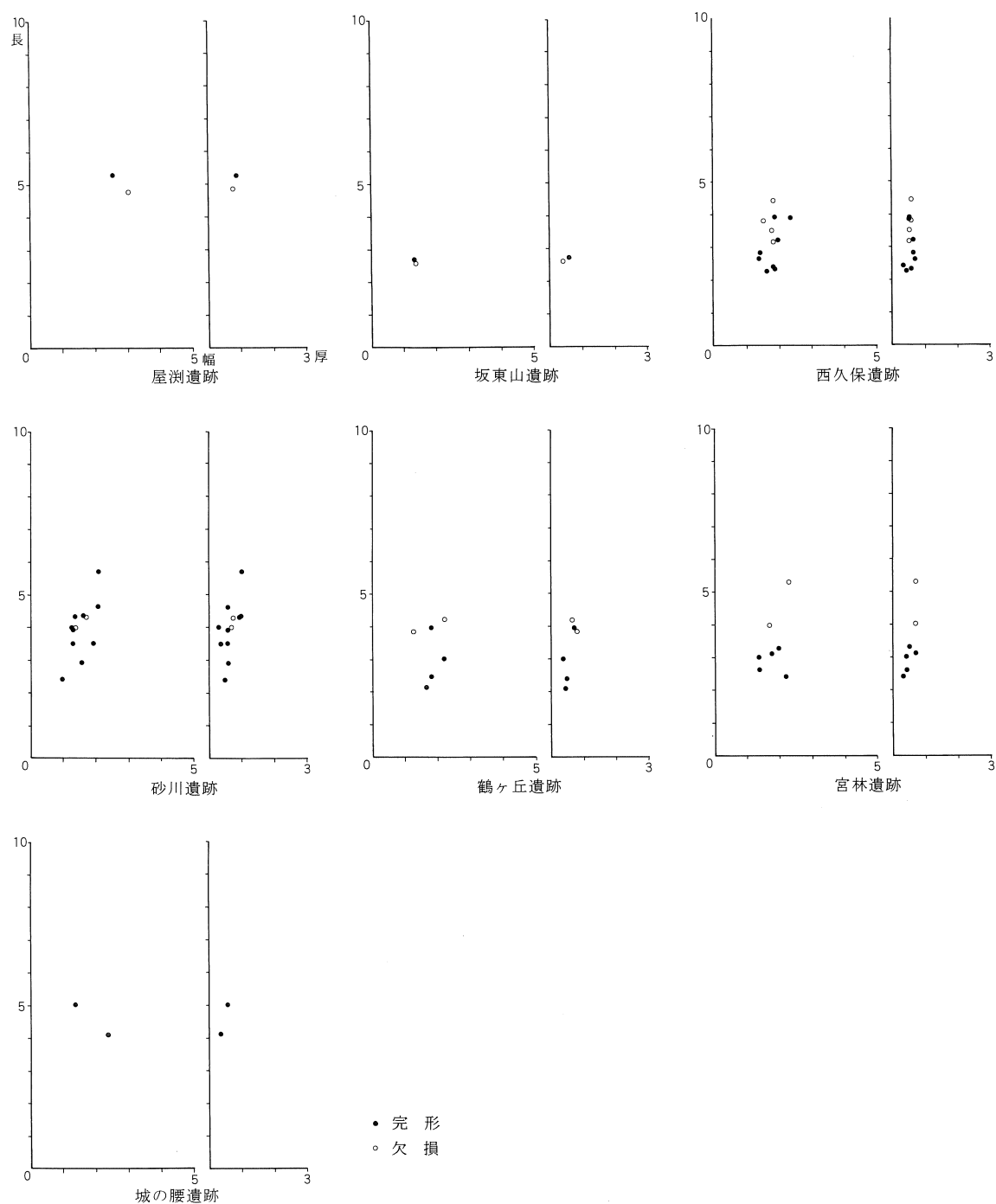
以上、当該地域の砂川期の遺跡を検討してきたが、最後に若干の整理と問題点の提示をしておく。

まず、近接する地域内に該期の遺跡が纏まっている状況が把握できた、これが何を意味しているかは未解決であるが、石器集中のグループが複数で構成される

遺跡、石器集中は1箇所であるが、ナイフ形石器を多数保有する遺跡、石器集中は複数あるがナイフ形石器の数はそれほどでない遺跡の、各パターンが見られた。

ナイフ形石器は遺跡間で細かい点の違いはあるが、全体的に非常に近似しており、これらを有意な纏まりと考えて、再度砂川型式に関して考えてみたい。

第46図 ナイフ形石器（第2形態）



田中氏の「砂川型式」に対する批判として、汎列島規模での型式が存在するか、それが果たして型式と言う概念に馴染むのかということがある。先土器時代は遊動生活で、かつ人口圧が低いため、より広い範囲を生活空間として利用した結果、型式の空間的拡がりが大きいといった考えも可能かもしれないが、実際の資

料を見る限り、縄文土器の変化よりも著しく広いとは思えない。

砂川型式の範囲をどのように考えるのか、ナイフ形石器の2つの形態、尖頭器の共伴関係等とするのならば、その設定に同意できる部分は多い。しかし、ナイフ形石器の特徴が地域に存在する場合、より狭い範囲

で型式を設定し、広い空間で共通する要素の石器群が、時間的に限定できる場合、ホライズンとして認識するほうが妥当と考える。すなわち、より限定した型式としての砂川式の提唱であり、型式間での影響関係を見極める努力が、最も要求される課題であると言える。

ここで取り上げた資料に、武蔵野台地の一部を加え“砂川期：砂川式”として捉えなおし、大宮・下総・相模野台地等の該期石器群と比較検討することで、何が見えてくるのか考える必要がある。筆者は石材決定論者ではないが、ナイフ形石器を作る際、石材が具現化に一定の制約となるであろうことは確かである。それは、石器の形にどの程度影響を与えるのか？ その際、石材の嗜好がどの程度働くのであろうか。該地域

でチャートと頁岩は在地系石材であるが、それだけが用いられたのだろうか。

例えば、大宮台地の場合で考えると、各遺跡によって黒曜石・頁岩系・チャートが片寄って用いられており、ナイフ形石器の形態も該域のものに近似するものと、かなり異なる形態のものがある。しかし、ナイフ形石器の形態に各遺跡を繋ぐ要素を見いだすことができ、同一時期の石器群として押さえることができる。荒川低地を挟んだ2つの地域において、共通する要素を持ちながら異なる製作原理が働いているようである。それぞれの独自性と、開放性をもって連結する単位を、型式として捉えておきたい。

## 参 考 文 献

- 伊藤博司 1991『城の腰遺跡・霞台遺跡（第8次）』青梅市教育委員会
- 大塚達朗 1995「榎原文様式論」『東京大学文学部考古学研究室紀要』第13号 東京大学文学部考古学研究室 pp.79～141
- 織笠 昭 1978「鈴木遺跡VI層出土石器群についての一考察」『鈴木遺跡Ⅰ』鈴木遺跡調査団 pp.278～328
- 金子直行 1994「貝殻沈線文系土器群終末期の様相－吹切沢式と子母口式の関係について－」『縄文時代』第5号 pp.29～51
- 栗岡 潤・西井幸雄 1995『西久保／金井上』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第156集
- 佐藤宏之 1991「日本列島内の様相と対比－2極構造論の展開－」『石器文化研究シンポジウムA T 降灰以前の石器文化』3 石器文化研究会 pp.129～140
- 佐藤宏之 1992『日本旧石器文化の構造と進化』柏書房
- 砂川遺跡調査団編 1974『砂川先土器時代遺跡－第2次調査の記録』所沢市教育委員会
- 鈴木秀雄・西井幸雄 1996『坂東山／坂東山西／後B』埼玉県埋蔵文化財調査事業団第166集
- 竹岡俊樹 1979「中部地方南部における＜石刃＞とナイフ形石器について」『史潮』新5号 歴史学会 pp.114～135
- 田中英司 1979「武蔵野台地Ⅱb期前半の石器群と砂川期の設定について」『神奈川考古』第7号 神奈川考古同人会 pp.65～74
- 田中英司 1984「砂川型式石器群の研究」『考古学雑誌』第69巻第4号 日本考古学会 pp.1～33
- 田中英司 1987「埼玉県の石器と北海道の石器」『埼玉の考古学』柳田敏司先生還暦記念論文集刊行委員会 pp.13～27
- 谷井 彪 1976『鶴ヶ丘』埼玉県遺跡発掘調査報告書第8集
- 谷井 彪・細田 勝 1976「関東の大木式・東北の加曾利E式土器」『日本考古学』第2号 日本考古学協会 pp.37～67
- 戸沢充則・安藤政雄 1987「7 砂川遺跡」『所沢市史原始・古代資料』所沢市史編さん委員会 pp.39～54
- 長崎潤一他 1991『お伊勢山遺跡の調査第2部旧石器時代』早稲田大学所沢校地文化財調査室
- 西井幸雄 1986『中砂遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第60集
- 西井幸雄 1987「3 中砂遺跡」『所沢市史原始・古代資料』所沢市史編さん委員会 pp.22～27
- 松村明子 1978「鈴木遺跡Ⅳ層出土石器群についての一考察」『鈴木遺跡Ⅰ』鈴木遺跡調査団 pp.252～277